

**【研究ノート】**

幻想小説  
聴こえる／寄り道

増 田 辰 良

研究ノート

## 幻想小説 聴こえる／寄り道

増田辰良

### 1. 聴こえる

「先生。この科目は学科の推奨科目ですよね？」

講義終了後、教室を出ようとする宮下教授は女子学生に呼び止められた。

「ああ、そうだよ」

「わたし、2年の山口夕愛やまぐちゆうなです。来週の講義から録音してもいいですか？」

夕愛のその目も声も強く訴えていた。

推奨科目とは、専門科目を学ぶ上で必要な基礎的素養を身に付けるために学科が履修を推奨している基幹科目のことである。

「ああ……」宮下は一瞬、言葉を飲み込んだが、「いいよ。テープを回すのね」と笑みを浮かべ、「でも、再生して勉強するっていうのも大変だ。講義をしっかりと聞いて、理解してしまえばいいんじゃないのか？」そう論してみた。

「わたし、集中力がなくて」いかにも自信がないという声だった。「分かった。いいよ。回しなさい。一向に構わないから」宮下は勇気付けるよう強く言った。

大学生の聞く力、書く力、読む力は技術の発展と反比例して劣化しつつある。聞かなくても、板書をノートに取らなくても、スマホの録音と撮影アプリを操作さえできれば、ことが足りる。いいような良くないような時代になったものだ、と宮下は苦笑する機会が増えた。

翌週の夜。夕愛は自宅でノートを開き、スマホの録音テープを再生した。

テープからは宮下の明瞭な声が続いてきた。

「(テープの音)じゃあ、講義を始めるぞ！ 今週から、2コマ使って、微分の復習と勉強をするから。経済学は2変数までの微分の操作ができないと理解できないからな。いいかあ。講義のタイトルは『微分の基礎』。3つのことを復習する。1. 平均値、2. 平均変化率、3. 微分だ。最後の微分のところでは、大学で使う微分法を教えるから。そこがメインだぞ。いいなあ。」

1変数の微分は高校生のときに数学IIで勉強したと思うけど、微分を理解するには、まず平均値の概念を知る必要がある。平均値。いま、3人の人間がいて、その合計の体重が150kgだったとする。3

キーワード：幻想小説、再生、古書店、蔵書、孟蘭盆会うらぼんえ

人の平均体重は150kgを3人で割って、50kgとなる。この限りでは理解できるな。経済学はこれをグラフで表現するんだ。いいかあ。グラフで表現すると、よこ軸に人数、たて軸にkgをとり、座標(3、150)をとる。この50kgは、原点とこの座標を結んでできる三角形の、この傾きになっている。この傾きが大事だ。

次に、平均変化率を説明するぞ。言葉の意味は、変化した部分の平均値ということだな。いま、2つの変数 $x$ と $y$ があつて、 $y$ は $x$ の関数になっているとする。

$y = f(x)$ と書ける。こんな形状をしているとしよう。よこ軸の $x$ が $x_1$ から $x_2$ へ増えると、それとともにたて軸の $y$ も $y_1$ から $y_2$ へと増える。この変化した幅をそれぞれ $\Delta x$ と $\Delta y$ とおく。記号の $\Delta$ はデルタと読んで、変数が変化した幅を意味する。すると、変化した部分の平均値は、ここを原点とみなして、 $\Delta x$ 分の $\Delta y$ を測ればいい。 $\Delta y / \Delta x$ は、このことを結んで作られる三角形の、この傾きになっている。(チヨークで指し示す)ここ。いいかあ。大丈夫だな。

じゃあ、微分ってなんだ、と言えば、この増やした $\Delta x$ を限りなくゼロにして、ゼロにするわけだから、この点にくる。この点で接線を引いて、この傾きを測ることを微分する、と言うんだ。だから、記号で書くと、 $\lim_{\Delta x \rightarrow 0} \Delta y / \Delta x$ となる。高校の数学IIで、こう習ったのだ。

要するに、微分とはグラフ上のある点における接線の傾きを測ることなんだな。数学IIでは微分係数を求める、と習ったはずだ。うん。

これが経済学の中で、どう使われるのか、と言えばだな。よこ軸の経済変数の変化 $\Delta x$ がたて軸の経済変数にどの程度の影響 $\Delta y$ を与えているのか、を測っているんだ。いいかあ。例えば、ラーメンの好きな個人を考える。この個人は何杯食べれば、効用が最大になるのか、そのドンブリの数を決めるときに使うんだ。よこ軸に食べるラーメンの

(11)

ドンブリの数( $x$ )、たて軸に効用( $U$ )をとって、 $x$ と $U$ との関係が原点を通る上に凸な2次関数として描けるとしよう。限界効用逓減の法則が成り立つケースだ。こんなグラフになる。効用というのは、精神的な満足度だったな。経済学の中の間人はこれを最大化することが目的となっている。

微分をするとは傾きを測ることだけど、このグラフの頂点、つまり効用が最大になる点では傾きはない。ゼロ。でも頂点までの、ここで $x$ がここからここへ増えると、 $U$ もここからここへ増える。なので、ここに接線を引くと、ここにいる三角形のこの傾き、これが限界効用だよな。この限界概念もすでに習って知っているよな。記号で書くと、 $\Delta x$ 分の $\Delta U$ 。包丁の先のように尖った、ギザギザになったノコギリの刃の……」

『包丁とノコギリ。どこへ捨てればいいかな?』

『えっ? 納戸に隠しておけば』

『おい。それじゃ、バレルって。めっちゃヤバイぜ』

「んんっ?? なに? これ?」夕愛は顔をスマホに向けた。

がすぐに、宮下の声が再生された。

「この傾きである限界効用はしだいに小さくなって、つまり限界効用逓減だ。この頂点で、効用は最大になるので、これに対応するドンブリの数をよこ軸で決める。頂点は傾きがないので、この2次関数を $x$ で微分してゼロとおき、 $x$ について解けばいいんだ」

『ブスッて刺れば、めっちゃめっちゃ気分もスカッとするだろうな。へっへっへっ』

『知らない。遊びたいのなら、バイトで稼ぎなさいよ』

「う〜う〜？ なによー、これ？ ブスッってヤルって？ なんてこんな会話が入っているの？ 講義とぜんぜん関係ないじゃん。もー」

友愛は唇を尖らせた。

再び、宮下の声 flowed.

「……だろ。次に、多変数関数の微分を教えるからな。偏微分だ。君たちは高校から文系の勉強をしてきたようだから、この微分法は大学で初めて勉強するはずだ。いいかあ、よく聞いて意味と演算の仕方を理解するんだぞ。U = f(x, y)。x をビール、y を枝豆とする。ビールと枝豆を飲んで食べて効用を最大化する個人を考える。偏微分の「偏」とは、全体のうちの一部という意味だ。だから、効用Uに影響を与える変数がxとyの2つあっても、どちらか一つの影響を測るときに使うんだ。

例えば、ビールの大好きな人は、ビールだけを飲んで効用を最大化する。そのとき、枝豆は一切食べない、と考える。このとき、xの变化のみが効用に与える影響を測るときに使うのが、この偏微分だ。xだけが変化するから、yは定数とみなして微分する。記号で書くと、こうなる。 $\partial U / \partial x$ 。∂はラウンディと読む。偏微分記号だ。一方、下戸、まったくビールの飲めない人は枝豆だけを食べて効用を最大化する。だから、記号で書くと、 $\partial U / \partial y$ を計算することになる。……どうであ〜……分かったかあ〜……ここまでを……」

『結局、包丁とノコギリはどう処分するの？』

『肉と一緒に燃えるゴミの日に新聞に包んで出しちゃおう』

『ゴミ処理場で見つけられちゃうよ』

『大量にあるゴミだぞ、いちいち汚い袋を開けたりしないだろ』  
『……だといいけどお。……高温で焼いちゃうから、跡形もなくなるってわけ？』

『そうだな。はっはっはっ』

「えっ、えっ？ なに？ なに？ どういうこと！ 肉??」夕愛は思わず、テープを止めた。「どうなってんのよー。講義とは関係のない会話が入っているなんてえ」口の中でぶつぶつ言いながら怒った。

翌日。誰かに聞いて欲しくて、友愛は友人の風果ふうかに電話をした。

「どうしたのよー。朝っぱらから。わたし、一講目を入れてないのよねー。普段なら9時までお布団の中なんですけど。友愛様。どうかされましたか」と、風果は大いに迷惑だという声とは裏腹に無二の親友の悩みである、ここはいっちょう聞いてやるか、という温かい心根も持ち合わせていた。

「ごめんねー。朝早く」と一応、気遣いをみせてから空き教室に入ると、夕愛は「ちよっと、このテープを聴いてくれる」すぐに再生した。テープからは宮下の大きく説得する口調での講義の音が流れてきた。

しばらくすると、風果は大きく伸びをして、「夕愛〜。わたしが数学嫌いだってことは知ってるでしょ。これ、なによー。宮下先生の科目でしょ。わたし、履修してないし。履修しても単位もらえそうにないし。どういふことよ。わたしに聴かせるなんて」と、文句を言い出した。

友愛は「シーー」と人差し指を唇に当てて、小声で「黙って聴いてよ。シーー」と繰り返した。友愛のただならぬ雰囲気きんきに圧され、風果は両手を机に投げ出して突っ伏したままで聴いた。

テープはなにごともなく、宮下の講義を再生し終った。

風果は、手に持つスマホをじっと睨みつけている夕愛の顔を覗き込んで声をかけた。

「で、友愛。なによー」

友愛は、訝しい目で「変だなあ〜」と声を洩らした。

「だから、なに？」風果は語尾を強め、掴んだ夕愛の腕を揺すった。

「このテープねえ、昨夜、再生すると、講義以外の内容が録音されていたのよ」

「それがどうかしたの？ 他の音を拾ったんじゃないの」風果はそっけなくそう返した。

「でも、講義中だよ。音を出してスマホを聴いている人なんていないじゃない」

「そりゃあ、そうだな。宮下先生の講義で音楽を聴いたり、ゲームなんてできないわな。ありえない。一番、評価が厳しい先生だもの」

風果は同意を口にしてから、「壊れてんじゃないのー。一度、お店に持って行って、診てもらえばいいでしょ。わたし、わかんないから」とぶっさらばうに言うのと、スマホで時刻を確認し、「じゃあ、わたし、経済政策論の講義に出るから。C館なんで、行くからねえ」と、屈託のない明るい声を残して立ち上がった。

友愛も重い腰を上げ、講義棟とは反対側にある第一研究棟にある宮下の研究室を訪ねた。

「先生。このテープ、変なんです」

「テープ？ ああ。講義のね。間違った説明をしたかなあ？」

宮下はあいそ笑いをして、右手で頭の後ろをぼりぼりと掻いた。

「いいえ。違います。ちょっと聴いてもいいですか」

夕愛はテープを再生した。しかし、90分の講義時間が終了しても講

義以外の内容は流れてこなかった。

「うん。我ながら、微分のご概念をうまく説明できている」宮下は得心した声で言ってから、「で、質問かい？ どこが分り難かったかな？ 教えるよ。いまのうちに理解しておきなさい」と、ニコニコ顔で付け加えた。

がしかし、友愛は怪訝な顔のまま、

「変だなあ〜。昨夜、再生したら。微分のところで、包丁だとかノコギリだとか……」

と、独り言を口にし、じつとスマホを睨みつけていた。

「傾きを表現するときに、包丁の先とかギザギザになったノコギリの刃、とは説明してたけど、表現が拙かったかな〜？ ごめんな〜。でも、分かるだろ？ あはっはっはっ」

友愛の心配を吹き飛ばすよう宮下は声を出して笑った。

それでも、夕愛がにこりともしないので、

「包丁、ノコギリねえ。別の講義に上書きしたり、あるいは別の録音が残っていたんじゃないの？ あるいはテープが飛んだりして〜」

と、声を弾ませ笑みを浮かべて助け船を出した。

「いいえ。テープは先生の講義しか取っていません。わたし、特に数学、苦手だから」

間髪を入れず夕愛は宮下の目を見て言った。

その目の凄みに圧され、宮下は、「むう……」口をつぐみ、考えてから、「わたしには分からんなあ〜。買った店で確認してもらえば……。そんなことよりも、よく復習しておきなさいよ。微分は大事だぞ」そう言って、宮下は満面の笑みを返した。

翌週も微分の講義が続いた。

「今日はラグランジュの未定乗数法 ( $\lambda$ ) を教えるから。これは制約条件付の最大化問題を解くときに使う微分法だ。先週、偏微分を教えたので、その応用でもある。いいかあ。ここでは効用を最大化するときに、時間と所得が制約条件になっているケースを考える。例えば、『つば八』でコンパをするとき、飲み放題、食べ放題で2時間3000円のコースがあるよな。2時間と3000円という制約のもとで飲んで食って騒いで、あーあ、今日は楽しかった〜って、あれだ……」  
もちろん、夕愛はテープを回した。

帰宅後。テープを再生した。

「(テープの音) 今日にはラグランジュの未定乗数法を教えるから。……時間と所得が制約条件となっている……」

『遊ぶ金がないんだ。貸してくれよ』

『わたしだって、ないわよ。単位を取らないと、卒業できないもの、バイトはしてないから』

『俺は、このままじゃ留年だ。覚悟してる。マージャン、競馬、パチンコ、パチスロに金も時間もかけ過ぎた』

「えーっ? また! 嫌だあ。なんでー、なんでー! こんな会話が入るの? 講義中だぞ」友愛は腹立ちを覚え文句を口にしたが、そのまま回し続けた。

『お前の両親は公務員だろ』

『うん』

『じゃあ、安定してるから金、持ってるだろ? もらえ』

『持ってるだろうけど……遊ぶお金なんてくれないってえ』

『くれないきゃ、ヤッてしまうか?』

『ええっ? なに?』

『ヤッてしまえば、金はすべてお前のものになるぞ。どうだ』

『なに? なに、言ってるの?』

『お前の親をバラすんだよ。へっへっへっ。そうすりゃあ』

『ちょ、ちょっと待ってよ! 本気じゃないでしょうね?』

「……このラグランジュ関数を各変数で偏微分をしてイコールゼロとおき、後は連立方程式を解けばいい。いいかあ、例題を解いてみるかな。……で、だなあ……」と、宮下の声が流れる。

『うまく処理すりゃあ、バレないさ』

『じよ、冗談は止めて!』

「えっ? まだだ、もうイヤ! これってえ?」と有愛はスマホを凝視し、すぐに手に取り、眉間に皺を寄せて一転、聞き漏らすまいと聞き耳を立てた。

『で、いつやる?』

『……』

「xイコール4、yイコール6、乗数の $\lambda$ は2分の1となる。簡単だろ。次に、全微分を……」

と突然、また宮下の明るい声が聴こえてきた。

『俺が包丁とノコギリを用意するから』

『本気なの？ 止めてよ。わたしの両親を…なんて』

「ううん？ なっ、なんて、なんて言ったの？」

友愛の不安はマックスに達していた。布団に入っても、まんじりともしないまま夜が明けた。

その朝、夕愛は登校する前に、スマホを買った代理店に立ち寄った。

「すみません。このスマホの録音機能を確認してもらえませんか」スマホを差し出した。

若い男性社員は作業の手を止め、スマホを受け取ると、「なにか、不都合がありますか？」と、笑顔で対応してくれた。

「はい。録音の途中で別の会話が入っているんですよ。それもまったく知らない」

「近くにスマホや音の出ている機器はありませんかね。それを拾っているかもしれないよ」社員は涼しい声を返してきた。

「ああ。わたし、学生で講義を録音しているのですよ。なので、教室は教員の声しかありません。が、途中のところどころに別の変な会話が録音されちゃってるんですよ。これ壊れてませんかね」

「普通に使っていれば、そう簡単には壊れませんよ。他の音を拾うこともありませんし。ううん。じゃあ、ここで再生してみてください。」

わたし、作業をしながら聴きますので」社員はスマホを夕愛に戻した。夕愛は、スマホをテーブルに置き、再生した。

「(テープの音) ……ラグランジュ関数を各変数で偏微分して……」

テープ音が流れると、社員は作業の手を止めて、頬を緩め声をかけてきた。

(六)

「懐かしいなあ。お客さん、経済学部のお客さんですね」

「ああ、はい」

「わたしも経済学部を卒業しました。微分、勉強しましたよ。いや、学生時代が懐かしい」と、言ってから、またモニターに向かい作業を始めた。

「(テープの音) ……通常、ビールと枝豆の両方を飲んだり食べたりして、効用を最大にするよな。なので、 $x$ と $y$ が同時に変化して、 $U$

に影響を与える。このとき、変数がすべて変化しているの、全微分をするって呼ぶんだ。各変数で偏微分をして、その後ろに $dx$ と $dy$ の記号を付ける。これも微分記号だ。全ての変数が変化するので全微分は

必ず、合計する。こう書くんだ。 $du = (du/dx)dx + (du/dy)dy$ これは全微分の公式のようなものだ。だから、偏微分ができれば全微分

もできる。逆も同じだな。いいかあ、簡単だろう。よく復習しておきなさいよ。じゃ、今日はここで終わろう」

90分間、講義の内容がそっくりそのまま再生された。

社員は、「どうもありませんね。壊れてませんよ」と、相変わらず笑顔で、「経済学って、ちょっと大変ですよ。理系ですもんね。数学がで

きないとい。でも、微分さえできればなんとかなりましたけど」と、夕愛の心配にかまうことなく、遠くを見る目をして言った。

夕愛は硬い表情を変えず、「変だな」と小さい声を洩らし、スマホをバッグに仕舞うと、立ち上がった。

社員は「また、なにか気になることがあれば来てください。お待ちしております」と、ドアまで見送りに来て、深々と頭を下げた。

夕愛はキツネにつままれたような気分です。頭を下げた店を出た。

「ほんと、変だよ。あれだけ鮮明に録音されていたのに。うう」

ん。なんで〜、なんで〜」と、口の中で繰り返しながら大学へと急いだ。

腑に落ちないまま宮下の研究室を訪ねた。

「先生。やっぱり、変なんです。お店で診てもらったんですけど、録音機能はどうもなくてえ。でも、ヤバそうな会話が録音されて、再生されるんですよ」スマホを手に説明した。

「またかあ。その椅子に座りなさい」と言っ、宮下は、「じゃあ、再生してごらん」と、促した。

夕愛はテープを再生した。聞き漏らすまいと、じつと聞き耳を立てている。一方、宮下はおつくうそうに書棚から本を抜き出しては、ペラペラと斜め読みを始めた。

結局、テープからはなにも変な音声は流れてこなかった。

「よく復習しておきなさいよ。じゃ、今日はここで終わろう」という自分の声を確認すると、宮下は開いた本をパタッと閉じ、「大丈夫じゃないかあ。ラグランジュの未定乗数法とその利用法、それに全微分をうまく説明しているぞ。特に、変わったことはないな」とニコニコと笑顔を返した。

「変だな。夜、自宅で再生するとはば鮮明に聴こえるんですけどね」小首を傾げる夕愛に宮下は笑みを浮かべたまま、「う〜ん。壊れてないとすれば、電波の関係かなあ？ 講義中に誰か学生がユーチューブかなんかで芝居やドラマを聞いているのかな？ 他の先生からワイヤレスイヤホンで音楽を聴いている学生がいるってことは聞いたことがあるけど。わたしの講義でそんな余裕のある学生はいないと思うけど」と、分からんと言う代わりに笑顔でそう答えた。

「先生のあの数学を使う講義で遊ぶためにスマホを操作している学生

なんていませんよ。受講生は30人くらいしかいませんよ。しっかり理解しないと単位が一番取り難い科目ですよ。それに学科の推奨科目ですから」夕愛は興奮して、怒ったように声を荒げた。

「そうだとは思うけどお……」一息おいて、宮下は「でも、録音されているなら、あの時間帯になにかの電波をたまたま拾っているのかもしれないなあ。あるいは、録音機能のどこか隠れた部分が壊れてないかあ？ はっはっはっ」また分からんという声音に笑い声を加えた。

「いいえ、壊れてないです。お店でテープを90分回して聴いてもらったのですが、異常はなくてえ。他の電波を拾うこともないそうです。……担当してくれた若い社員も経済学部出身で、微分の講義を聴き返して学生時代を思い出した、って爽やかな笑顔を返されちゃいましたよ」そう言う夕愛の声は真剣そのものだった。

「そっかあ。色んな機能が付きすぎて、なにかに反応してんじやないのかなあ。分からん。で、今回はどんな音を拾ったの？」埒が明かないとみて、宮下は（しょうがない付き合うか）という心中を覚られないよう訊いてみた。

「はい。それがですね。学生らしき男と女がいてですね。男は留年しそうで、遊ぶ金欲しさに女の両親を、殺す、殺すんだ、と思うんですがあ。両親は公務員をしてるって……」

ここで宮下の顔は凍りついてしまった。右手の掌を夕愛の顔の前にかざし、「ちよ、ちよと待ちなさい！」と思わず、声を張り上げ、「男女の学生がいて、男が女子学生の両親を殺す、と言ったのかい？」と、真顔で詰問するよう訊いた。

その勢いに夕愛は思わず身体をのけぞらせて答えた。「はっ、はい。そういうふうには聴こえませんでした。その男は遊ぶ金が欲しくて、包丁とノコギリを自分が用意して、バラスって」



それを聞くと、宮下は腕を組み、俯いてクルッと夕愛に背を向けた。「先生。どうかされましたか？」その背中へ、友愛は不安に満ちた声をかけた。

宮下は、「うん。あなたのその話でもし本当なら……本当ならば」数秒の間をとって声を落とし、「それは20年くらい前に、この大学の学生が犯した殺人事件だよ」と、はっきりと言った。

友愛は一瞬、目を見開き、宮下の背中を凝視して、「ええっ？ ええっ？ 殺人事件？ それって？」

と、声にならない声を洩らした。

「そう。包丁で刺し殺して、ノコギリで切り刻んで、燃えるゴミとして出して……。確か、凶器は新聞に包んでゴミ袋の底に……」

宮下が話し終える前に、夕愛は膝の上においたデイバッグをドサッと落とし、椅子からくずれ落ちた。

「山口さん。大丈夫かい？」

宮下は慌てて、夕愛の腕をとり、椅子に座らせた。床に転んだスマホを拾うと、すぐに冷蔵庫を開け「さあ、少し飲みなさい」と、ペットボトルのお茶を差し出した。

二口三口飲むと、夕愛は、「ふーっ」と、大きいため息を吐き、声を震わせ、「なぜ、わたしのテープにそんな会話が録音されたのですか？ それも再生すれば、わたしにだけしか聴こえないなんて？」と、ようやく言い切った。

すると、宮下は立ち上がり窓に近づき、背中を夕愛に向けたまま、遠くの空に視線を移して、ゆっくりと話した。

「男子学生は4年生でいかにも遊び人っていう身なりだった。女子学生は2年生で、どこにでもいる可愛い娘さんだった。裁判では2人の言い分が真っ向から違っていて、女子学生が遊ぶ金欲しさに男子学生

(八)

に頼んで両親を殺害させた、というので結審したんだよ。女子学生は泣きながら反論したけど、『濡れ衣を着せられた』男に騙されたって』もちろん、大学は2人を除籍処分にした。その後の彼らの人生については知らないよ。知る必要もないし」

「殺人ですか？」身体を強張らせたまま夕愛は「先生は、2人のことをよくご存知だったのですか？」と、その背中へ声をかけた。

その瞬間、宮下は肩をピクリと動かしたように見えた。さっと振り向いて、

「知ってたよ。さっき、思い出したんだけど……」一呼吸おいて、「だってえ、あの2人は、わたしの講義を履修していて、B502教室で毎週、あなたが座っている机に仲良く並んで受講してたからね」と言うのと、「うん、うん」とゆっくりと頷いてから、引きつるような笑みを頬に広げた。

(了)

**付記。**感動を覚える言葉、物語に出合うと、素人は「いいなあ、真似したいなあ」と思い、翻案を試みる。一方、玄人は「いいと思ったら真似てはならぬ」とそっぽを向いて、自分のやり方を見つけて、そこに拘る(「」は井上ひさし、2020、80〜81頁の言葉である)。実際には、この2つの間を右往左往するのであるが。素人の強み(?)で、アイディアくらいはもらってもいいだろう。無から有は生まれなないのだから。

ということ、拙稿のアイディアは、レイ・ヴクサヴィッチ「ささやき」(岸本佐知子・市田泉訳)(2017)から得ました。

ヴクサヴィッチは幻想を描く小説家として著名です。「ささやき」という作品は妻から、**野**をなじられる夫が無実の罪(?)を晴らすため、

自分が就寝中の音をテープに録音する、というところから幻想が始まります。身の潔白を確認しようとテープを再生すると、男女のささやきが聴こえてきます。夜、消灯後、ことの真相を知ろうと部屋に細工をしている、そのときふと見ると、ベッドには見知らぬ女が横たわっている、という理不尽な「恐怖」を起こさせて結末を迎えます。

幻想、あるいは奇想(異形)と呼ばれる小説の内容や文体はホラーとミステリーとが合わさったものと考えれば、理解しやすいかもしれませんが。読者はその理不尽さを持てる限りの想像力をもって想像しなければ、なぜこんな作品が書かれ、読まれるのか、という疑問に終始してしまいます。同じ著者の「俺たちは自転車殺す」(同文庫所収)という一見、タイトルも内容も理解し難い作品も読者の側に逞しい想像力さえあれば、「なるほどお」と読み込めます。

さて、拙稿も幻想小説を目指して執筆してみました。講義の録音テープを再生すると、かつてあった殺人事件の概要が流れてくる……という筋書きです。女子学生の両親を殺害する計画と実行は男子学生によって実行された。しかし、裁判では女子学生がその動機(遊びの金を手する)を作ったと認定されます。女子学生の濡れ衣を着せられた、という主張は認められません。女子学生の男子学生に対する恨み(理不尽)が夕愛の録音テープを通じて、再生されます。ちよつとだけホラー+ミステリー性を含んでいるのは、その再生音が夕愛にしか聴こえない、というところです。

こういう怖さの描き方は小池真理子(2017)を真似てみました。孫引きになりますが、小池が描く恐怖とはおどろおどろしい怖さではなく、「文章のリズムと行間のニュアンスだけで恐怖を醸し出す」(215頁)とところにあり、「いくら震え上がるような怖い物語であったとしても、そこには、読み手の美意識をくすぐるような情景が潜

んでいなければならない」(217頁)という(純)文学的な文体からなっているようです。

#### 参考文献

井上ひさし(2020)、『小説をめぐって』岩波書店、80〜81頁参照。  
レイ・ウクサヴィッチ(岸本佐知子・市田泉訳)(2017)『ささやき』『月の部屋で会いましょう』創元SF文庫、331〜347頁所収。  
小池真理子(2017)『ぼんやり』『水無月の墓』『解説』『水無月の墓』集英社、31〜52頁、189〜211頁、213〜219頁所収。

## 2. 寄り道

恐ろしく蒸し暑い8月12日のことだった。帰宅途中、ちよつと遠回りをして、大病院の斜め向かいにある古書店の前を歩いた。この古書店は30数年前に亡くなった父が最<sup>ひいき</sup>にしていた店で、父は病氣治療で入院中も病室を抜け出しては、しばしば出入りしていたようだ。商社マンであった父は落語本やそのDVDと、少数民族に関する書籍や雑誌の蒐集<sup>しゅうしゅう</sup>家でもあった。

父のDNAを受け継ぎ、私も中学生のころからせと本を買っては読み、評論や小説を書き残してきた。趣味の域を超え、生活を省みないこの書籍好きは性癖とも言われかねないほどだった。

クーラーなどない古書店は入口のドアを開けっ放しにしていた。私は古書の臭気に誘われて、スツーツと吸い込まれるように頭から入った。いきなり『岸田國士全集 全28巻』が目についた。これは初ボ

ナスで買い揃え、全巻読了したことを覚えている。棚から第1巻を抜き取り、表紙を開いて、目次を見た。

「ええっ？ これは書齋にあったものだ」

思わず、声を洩らした。

それが証拠に1989年9月20日読了、TMと自分の筆跡が残っていた。私は読み終えた書籍には目次の隅に鉛筆で小さく日付とインシヤルを記す習慣があった。他の巻も確認してみたが、どの巻にも年月日とTMが記されていた。

(私のものだ！)

取り乱した動きをする私に気づいた店主らしき老女が奥の事務机から疑心に満ちた目をして、

「いらっしやいませ」

と、枯れた声をかけてきた。

その視線にかまわず、私は店内を早足に回ってみたい衝動に駆られた。なぜならどの棚も自分が所有していた書籍で埋まっていたからである。『ギリシヤ悲劇 全14巻』、『井上ひさし 短篇中篇小说集成 全12巻』、『定本 夢野久作全集 全8巻』、『岡本綺堂 探偵小説全集 全2巻』、『星新一 ショートショート1001 全3巻』。まるで、自分の書齋に座っているかのようなであった。

翻訳本の棚では思い出深い3冊を手にした。『モーパッサン短篇集 (一、二、三)』。これは自宅の2階の廊下に設置していた書棚の一段目に入っていた。今年、米寿を過ぎた長男が小学2年生のとき、その書名を面白がっていたので、私はモーパッサンの人物像を聞かせてやった。もちろん、彼は理解できずにキョトンとしていたが、その間の<sup>ま</sup>けた顔を思い出すと、私は今でも腹を抱えて笑ってしまう。

「すみません。ちょっと来てくれませんか？」私は、堪<sup>た</sup>らず店主に声

(10)

をかけた。

「はい」店主はフワフワとした足取りで、目には無理やり笑みを浮かべ「何かお探ですか？」と訊いてきた。

「いえ。これらの書籍はどこから仕入れたのですか？」

「仕入れ先はいろいろでえ、オークションで落札したり、他の同業者と交換したり。でも、まあ、お客様が持ち込んだものが多いでしょうかねえ」

「そうですか。実は、この店のものは、私の自宅にあったものばかりなのですよ」

「ほろ。なんて不思議な」

店主は唇をコの字にして事もなげに言った。それから顔を一般大衆本のコーナーへ向けて、

「あの落語もですか？」

と、目線を上げた。その口調は私の発言の真偽を確認したいようであった。

「落語？」

「ほら、壁ぎわの上の棚ですよ」店主は指差した。

私は首を大きく動かして壁のほうを見上げた。そこには、『柳家小三治(上、下)』と『古今亭志ん朝 二期会』の落語DVD、『落語昭和の名人 極めつき72席』のCDセットがズラリと並んでいた。

「いやあ、懐かしい。確かに、父のものです。よく聴き入っていましたよ。懐かしいなあ」

私はかつての愛蔵本の背表紙に触れたり、棚から抜き出し、ペラペラと捲って回った。薄いセロハン紙に包まれた『定本 短篇集 モザイク』には目が吸い付いた。その著者である三浦哲郎は私が憧れた作

家の一人であった。その134ページには私が書き込んだ文字も残っていた。値札を見ると、3000円。私が記した年月日からすると、52歳のときに読了したものであった。ページを捲るたびに、嬉しさと懐かしさがこみ上げて来た。

『「じねんじょ」「みのむし」「つやめぐり」。どの作品も、いいよなあ』  
また、小さな声を洩らした。と同時に、買い戻したいという欲求がムラムラと興り、慌てて財布の中身を確認した。が、なんとトンマで残念なことか。埃一つ入っていない。私の落胆した顔を店主はしっかりと見ていた。その目は明らかに憫笑をおびていた。

しかたなく、奥へと進んだ。そこには少数民族関連の書棚があった。父の書齋にあった『アイヌ絵を聴く』『アイヌ風俗画』の研究』『近代アイヌ教育制度史研究』……が目に留まった。手に取り、表紙の内側をみると、修正液で消された蔵書印の跡も残っており、微かに姓名を読み取れた。

その棚の奥に置かれた小さな丸テーブルには、しきりとノートに鉛筆を動かしているお爺さんがいた。常連さんなのであろう、湯呑も置かれていた。私の視線を感じたのか、一瞬、顔を上げたが、すぐに下げて手を動かし、一心になにかをメモしている。その仕草や姿形は亡くなる前の父にどこか似ていた。

さらにその右隅にある棚も自分が所有していた文庫本で満杯になっていた。目の前には夏目漱石『私の個人主義』を抜き取りペラペラと捲った。これは、アイデンティティーの不安に襲われ、自分とは何者なのか、裸になって己の内面を見つめ直そうと、深く悩み込んだ高校1年生のときに精読し、自分は自分でしかない、という自我を認識させてくれた評論集である。

(これで生き方を決めただよなあ)

棚に戻してから、ぐるりと見回す私の目に創元推理文庫の1冊が飛び込んできた。

(おお。これは……)

抜き取ろうと、右手を出すと、いつの間にか隣にフワッと立つ若い男の出した左手とぶつかった感じがした。男は脇に単行本を挟んでいた。その背表紙には『ある若き作家の死』というタイトルが付いていた。「すみません」私は思わず、謝った。  
「すみません、じゃないでしょ」男のその声は「邪魔するな」と言いあげた。

そのスキに私は、もう一度、手をかけようとした。

が、男はその手を制止し、サッと抜き取り、怒気をおびた声で言った。「買いたくて、自分が先に手を出したのだから、自分に譲るべきだ」その声に怯むことなく、私はしっかりと落ち着いて事情を話した。

「実は、この店にある本はすべて私の蔵書だったものなのです。懐かしくて、この際、気に入ったものを買戻そうと思ひまして。それが……」

「これかい？」男は文庫をかざし、ニッと口元を歪めた。

「ああ、そうなんです」

「あなたには懐かしいかもしれないが、自分はこれを読んで次作のアイデアをもらいたくてさ。自分は物書きなんだよな。あなたとは違って、まだ食っていかなきゃならんし、女房子供も養わなきゃならん。」

……自分が手に入れるべきものだね」

そう言うと、男は「ふん」と鼻息を鳴らした。

「物書きであろうと、なかりうと私はその『街角の書店』に収録されているハーヴィー・ジェイコブズの「おもちゃ」の大ファンなのでえ……もう一度でいいから、あの(奇妙な味)を堪能してみたいのですよ」

私は素直に心中をこう明かした。

「奇妙な味？」

「そう、奇妙な味ですよ。これは江戸川乱歩の造語で、ミステリーともSFとも幻想怪奇小説ともつかない内容で、読んだ後にモヤモヤした気持ちに襲われて、理屈では割り切れない余韻が残る……そんな作品のことですよ」

「モヤモヤ……？ 理屈では割り切れない……？」

「乱歩の説明によると、ユーモアはあるんだけど、ふてぶてしくて、無邪気な残虐とでもいう……」

「結論の解釈を読者に委ねるとい創作法かな？」

男にはこのジャンルの読書体験がないようだった。

「うーん、なんて言うかあ、もっと悪賢い巧妙なくらみを含んだ書き方になっていて……でも、そう理解してもいいでしょう」

「……そこまで惚れ込んでいるのなら……さっきは漱石を手にしていたようだし、きつとあんたも強情なんだろ。が、それならなおさら譲りたくないね」

最後の言葉を強調し、男は私を睨みつけた。

私も（負けてなるものか、と）ありたっけの勇気を振り絞って怖い目付きを返した。

その瞬間、険悪な空気が薄暗い天井からザザッと降ってきた。

このやり取りを見ていた店主は、空中をフワッと飛ぶ勢いで近づいて来て、

「まあまあ、ここは若い作家さんにお譲りして、別の違った味のあるおもしろい作品を書いてもらいましょうよ」

と、仲裁の労を取ろうとした。

「無理です!!」私は強く言い放った。

(一一)

すると、店主は目尻にいく筋もの皺を作り、

「たとえ無理でも、お金を払っていただけないのであれば、お渡しするわけにはまいりません」

と、言ってから「ふっふっふっ」と嘲笑を洩らした。

それを聞くと、（ああ、そうだった）私は足を浮かせたまま、外気に吸い込まれるように頭からスーツとドアを出た。（了）

付記。奇想（怪奇）小説とホラー小説とを識別することはなかなか難しい。書き手がホラーを描いているつもりでも、読み手がホラーを体

感しないかぎり、それは単なる奇想（怪奇）小説にしかすぎません。拙稿は、明らかにホラー小説ではありません。読後に恐怖を感じる言葉や一文はどこにもありません。もやもやした〈奇妙な味〉が残るだけ

です。冒頭の季節、日付の設定から分かるように、これは霊があの世からこの世へ盂蘭盆会のために戻り、自宅へ向う途中を描いた物語

です。ただし、登場人物（？）はすべて亡者ですが。そう読み取っていただけでしょうか。

元より、筆者はホラー小説を描く意図はさらさらありません。が、拙稿をホラー小説から遠ざけている主な理由を挙げてみましょう。それは「目に見えない存在（怪物―筆者）による威嚇」（荒俣、

1994、311頁）が描かれていないからです。読み手にとっては、見えない怪物がいちばん怖いのです。これを書き手の側から言うと、

読み手を飽きさせないために「見えない怪物は、物語の興味を最後まで引っぱってくれる」（前掲、荒俣、312頁）実に好都合な存在（？）

なのです。なので、透明人間の「……（筆者略）正体が暴露されて意味的に透明でなくなった瞬間に」（前掲、荒俣、312頁）目に見え

る恐怖は消滅してしまいます。こうした怪物は、拙稿には登場しませ

ず。

ん。もやもやした〈奇妙な味〉をご賞味いただければ、筆者の意図は十分すぎるほど充たされています。

参考文献

- 荒俣宏 (1994) 「恐怖をふたたび愛するーホラー小説と現実の恐怖」『短篇小説集』集英社文庫 309～317頁所収。
- シオドア・スタージョン、G・K・チェスタトン 他 (中村融編) (2017) 『12の奇妙な物語 夜の夢見の川』創元推理文庫。
- フレドリック・ブラウン、シャーリー・ジャクスン 他 (中村融編) (2015) 『18の奇妙な物語 街角の書店』創元推理文庫。

